

個別の課題を抱える生徒の変容を促す取組みに関する事例研究
—継続的・包括的取組みを通して—

Case Study on Efforts to Promote Changes of Students
with Individual Problems:
Through Continuous and Comprehensive Initiatives.

八川 慎一
Shin-ichi HACHIKAWA

岡田 大爾
Daiji OKADA

『広島国際大学 教職教室 教育論叢』
“*Hiroshima International University Journal of Educational Research*”
ISSN:1884-9482

第9号 抜刷
Off Print of the 9th Edition

広島国際大学 心理科学部 教職教室
Issued by Hiroshima International University Teacher Education Unit

2017年 12月
December, 2017

個別の課題を抱える生徒の変容を促す取組みに関する事例研究 —継続的・包括的取組みを通して—

廿日市市立 阿品台中学校 八川 慎一
広島国際大学 教職教室 岡田 大爾

要旨：生徒指導提要には、「生徒が抱える課題は一人一人の生徒によって様々であるので、一人一人の生徒の性格、能力などや、さらに生活環境、発達の程度、学校での生活の状況など、一人一人の児童生徒に応じた効果的な生徒指導が必要」と書かれているが、個別の課題を抱える生徒についての変容を促す長期間の継続的・包括的取組みに関する事例研究は少なく、学校現場における長期間の継続的・包括的取組みの目的、方法及び生徒の変容及びその成果と課題について明らかにした。本研究の対象中学校は、各学年10数名の小規模校で中学2年生の課題が大きかった。約3分の1の生徒は、先生によって態度が大きく異なり、厳しく指導すると暴言を吐いたり、気分が悪いと言って保健室へ逃避したりした。担任を中心に指導を重ねるが、しばらくすると再発した。また、小学生の時から喫煙が常習化する数名の生徒は、トイレや更衣室、校外等で喫煙が発覚することもしばしばあった。様々な問題行動を繰り返す生徒たちに、後追いの治療的生徒指導にあたることが続いた。さらに、前年度から関わってきた教師たちの疲弊感と、課題の大きい生徒たちに関わりたくないという思いを強く感じる状況であった。このような実態の中、個別の課題を抱える生徒の変容を促すため、組織的で毅然とした治療的生徒指導をやりきることを継続すること、さらに並行して生徒を多面的、総合的に理解していくことと共に保護者との継続的な連携も重要であると考え、家庭訪問等を通して生徒・保護者と関わりきる指導を考え、実践した。さらに、疲弊していた教師たちも一緒に組織的に取り組む中で関わりきる達成感を感じさせるようにした。このような継続的包括的な取組みを通して、生徒・保護者との信頼関係を築き、生徒指導上の課題を解決し、個別の生徒の変容とともに生徒全体の将来における自己実現を図る自己指導能力の育成に効果が見られた。一方、生徒指導体制の小中連携(小学校と中学校の連携)に課題が残った。

1. 研究の考え方

1.1 児童生徒理解の重要性について

生徒指導提要¹⁾に、「生徒指導は、一人一人の児童生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の児童生徒の自己指導能力の育成を目指すもの」、「生徒指導を進めていく上で、その基盤となるのは児童生徒一人一人についての児童生徒理解の深化を図ること」、「児童生徒理解においては、児童生徒を多面的・総合的に理解していくことが重要」と述べられている。

柳生(2012)²⁾は、教師の主体性に基づく生徒指導、教育相談において、児童生徒理解の重要性について次のように述べている。「生徒指導は、『児童生徒の理解に始まり、児童生徒の理解に終わる。』(中略)信頼関係はアセスメント(査定)から始まる。(中略)先生が子どもの症状に関心を持つことは悪いことではないが、家庭訪問を通して、目の前の子どもの症状だけでなく子どもの全体、体、心、日常生活全体にまで関心を持つことが必要である。」と述べている。このように、生徒の学校における症状だけによるアセスメントではなく、家庭訪問等を通して生徒の全体像の把握を行う必要があることが強調されている。

1.2 生徒指導計画—子どもとの関係のあり方—

①「子どもに関わる」視点として柳生(2012)³⁾は次のように述べている。「子どもに関わるということは教師にとって手間のかかる、苦勞の多いものである。しかし、常に寄り添う姿勢、手間をかける活動が共感や受容の具体的な姿であり、教育的なアセスメントとすることができる。アセスメントとは査定、すなわち児童生徒理解である。アセスメントがあつて初めて指導・支援の方法が生まれてくるものである。」このことから、子どもに関わることを通して教育的なアセスメントを行い、指導、支援の方法を見出すことが必要であると考えられる。

②「子どもに『着く』こと、子どもに『付く』こと」の視点として柳生は、次のように述べている。「問題行動、とりわけ反社会的な問題行動のほとんどは教師のいない場面で発生する。具体的にはいかなる時間帯であっても教室や部活動など、子どもだけにいる時間をつくらないことが必要である。」

③「子どもに気づく」視点として柳生は次のように述べている。「問題行動は児童生徒が発信する苦しみのサインであるとの原点に戻ると、『子どもに気づく』という教師の姿勢は生徒指導の重要なポイントである。----- (中略) ----- 生徒指導は児童生徒理解に始まり理解に終わると言われているが、教師は日常の生活をともにすることでこの理解(アセスメント)が深まっていくのである。この理解の過程が信頼関係の構築そのものなのである。」

これら②、③のことから、できるだけ子どもに付くことから問題行動の未然防止を図り、子どもの発するサインから児童生徒理解を深める姿勢を教員全体でもつことを通して、教師と生徒との信頼関係を築くことにつなげることが重要であることが分かる。

④「組織で動く(校長を中心として組織で動くことを指す)」視点として、柳生は次のように述べている。「生徒指導は一人で行うものではない。実際に動くのは各々の教師集団である。この教師の活動に意義や方向性を持たせて力づけることが管理職や生徒指導主事の役割である。」

以上のことから、生徒指導は、校長のリーダーシップのもと、生徒指導主事のリーダー性を生かし、それぞれの教員の生徒指導の取組みについて意義や方向性を示し、組織的な生徒指導体制を確立して実践することが重要であると言える。

1.3 児童・生徒理解の進め方

有馬(2002)³⁾は、児童・生徒理解を左右する教師の見方において、対人認知を歪めやすい要因、

教師特有の児童・生徒認知の仕方、それぞれの教師独自の見方を述べた後、児童・生徒理解の進め方について次のように述べている。「教師は、教師集団や児童・生徒集団から、とくに肯定的あるいは否定的に認知されやすい児童・生徒に対して、自らの認知的態度をコントロールし、できるかぎりニュートラルな立場から認知を行うように努める。」また、「教師は、児童・生徒認知において、児童・生徒情報に関する一元的な視点に重みづけする見方から、より多元的な情報を収集し、重みづけを変化させることで、児童・生徒認知を固定化しないようにする。」さらに、「即断的・短絡的に結論づけることを避け、何度も、多角的に確認しながら認知を行う。」

これらのことから、教師は、組織的に生徒指導を行うにあたり、それまでの状況から生徒を肯定的・否定的両面で認知するのではなく、常にニュートラルに戻して認知するようにし、多元的に情報を収集し、生徒の認知を固定化せず、実践においても多角的に確認しながら実践につなげることが必要であることが分かった。

2. 対象中学校の状況と仮説

2.1 対象中学校の学校・生徒の概要

対象中学校の地域は、まわりを海や山に囲まれ、豊かな自然という教育資源に恵まれている。また、地域の老人会とのつながりを生かしたしめ縄づくりや農園活動等の取組みを継続しており、地域とのつながりを大切にしている学校である。

対象中学校は、各学年10数名の小規模校で、生徒は保育園から中学校卒業までの約12年間、クラス替えがなく共に過ごしている。生徒は全体的におとなしく、一人一人はまじめで優しい。しかし、小集団の中で慣れ合いの傾向になるときは、仲間同士で伸びていこうとする面に課題が見られる場合もある。また、固定的な人間関係になりがちで、人数に限りがあるため、いろいろな人と関わり合うことを仕組むことが難しい。幼いころから少人数で過ごしてきているため、それぞれの長所や短所もよく知っており、力関係は固定化の傾向にある。慣れていることから表面上の和を保つ傾向もみられる。これらのことから、小学生時からよりよい関係の集団であればよい人間関係が継続するが、仲間関係が崩れていけばクラス替え等がないため、修復することはかなり困難であった。

2.2 対象中学校の生徒、保護者、教員の状況

①生徒の状況

取組みの当初の状況は、1、3学年は落ち着いた学年で、生徒間の関係もよかった。しかし、2学年の課題はたいへん大きかった。2学年10数名中の約半数は怠学傾向にあり、約3分の1の生徒は、先生によって態度が大きく異なり、教師と生徒との人間関係を築くことができていなかった。授業に集中できず、ノートへの落書きや私語を続けて授業を妨害し、厳しく指導すると暴言を吐いたり、気分が悪いと言って保健室へ逃避したりした。保健室に入り浸る生徒の約8割は、遅刻や早退、欠席が多く、その中で小学生の時から喫煙が常習化する数名の生徒は、トイレや更衣室、校外等で喫煙が発覚することもしばしばあった。さらに長期休暇に入ると髪を染める生徒も複数いる状

況であった。

その他、2学年の生徒の前年度の状況では、真面目な生徒の靴の中に押しピンを入れ、嫌がらせをするいじめが継続してあった。また、前年度に関係がよくなかった卒業生から男子生徒が暴力等の被害を受け、その捌け口として問題行動につながる悪循環が見られていた。

②保護者の状況

全体的には協力的であったが、問題行動等のあとの後追いの指導の中、一部の保護者との信頼関係は築きにくい状況であった。昨年度までの状況として、問題行動に関する保護者連携では、学校の対応や指導が問われ、よくない関係が続いていた。

③教員の状況

本研究の初年度は、教員の本務者の約4割が転勤で入れ替わっており、生徒との人間関係をこれから築いていく状況であった。これまで問題行動の指導を行ってきたが何回指導しても改善が見られず、問題行動の喫煙や染髪、いじめなどが繰り返されていた。何とかしたいという思いはあっても疲弊感・徒労感が続き、問題行動を繰り返す生徒たちと関わりたくないという思いをもっている教員も複数いる状況であった。また、問題行動を繰り返す生徒たちを「この生徒たちが信じられない。」「この生徒たちは、どうかしている。」など、このような生徒たちと関わりたくない思いをもった教師の言葉として日々聞かれる状況であった。

2.3 研究の仮説

本研究では、「個別の課題を抱える生徒たちを中心として多面的・総合的な生徒理解を図り、それらの生徒たちに関わりきり、個に応じた指導を継続する粘り強い取組みと一人一人のよさを見つけ、役割と関わりを仕組む取組みを継続することで、個別の課題を抱える生徒を変容させることができるであろう。」と仮説を立てた。

3. 実態を踏まえた取組みの視点

【生徒に関わりきる粘り強い取組み】

小規模校の利点を生かし、個の課題に応じ、家庭との連携をアクティブに行い、状況に応じて臨機応変に取り組む。その中で、生徒が変容するまで関わりきる教師の覚悟と信念をもって取り組む志を持ち続ける。

①生徒理解を図る取組みのポイント

- ◎生徒に関わる視点として、全教員が過去の問題行動等の状況にとらわれず、先入観をもたず一人一人の生徒に関わり、よいところを評価し、よくないところを指導する体制を築く。生徒指導を繰り返す生徒についても粘り強く関わり、他の生徒と同様にブレない生徒指導を継続する。また、日常の教育活動の中で良い面を見つける努力を継続し、一人一人の言動や態度等を評価する。
- ◎日常のあいさつ・声かけなども同様に先入観をもたず、表情豊かに行う。
- ◎授業において教科指導の中に生徒指導を意識した取組みを行う。課題のある生徒たちにも活動場

面を設ける工夫及び、道徳、総合的な学習の時間における工夫などを実践する。

◎給食指導においては、これまで担任か副担任のどちらかが日替わりの交代でつき、指導していたが、担任・副担任とも教室で給食準備のときから生徒に関わり、給食指導を行う。

◎保健室に入室を繰り返す怠学傾向の生徒の状況の改善を図るため、養護教諭から状況を把握するとともに、生徒との教育相談を行い、保護者とも連携して改善を図る。

◎課題のある生徒の状況を他の生徒たちに広げていかないための取り組みやフォローを行う。

◎一人一人の進路や将来を考えたキャリア教育の視点をもった声かけを通して、一人一人を認めて希望をもたせる。

②家庭との連携におけるポイント

◎これまで問題行動後の指導に関する家庭訪問が主であった。生徒理解を深め、保護者との信頼関係を築くため、次のポイントを押さえてすべての生徒について家庭訪問による保護者連携を図る。

- ・欠席はもとより、遅刻、早退のときも1日目から家庭訪問を行う。家庭訪問について、担任はもとより、場合によって副担任、生徒指導主事、養護教諭等とともに複数でも行う。
- ・部活を停止している定期試験週間に、担任している生徒全員の家庭訪問を行い、生徒へ試験勉強に向けての励ましや家庭学習を促す声かけとともに保護者との連携（家庭生活の把握）を行う。
- ・教育活動の中で、生徒が活躍した事、よいことをした事を評価し、家庭へも伝える訪問を行う。

4. 取組みの実際と生徒の変容

4.1 2年次の取組み

本研究では、特に信頼関係を築きにくい状況であった女子生徒Aとの状況に触れて本主題に迫る。

①生徒Aとクラスの状況

中学2年生に進級した女子生徒Aともう一人の女子生徒は、年度当初の在校生が始業式・入学式を準備する日である4月5日に髪を染めた跡が残っている状況で登校する。昨年度までの担任と生徒指導主事が指導を行うところから関わりが始まった。

始業式のときに担任発表があり、初めての学活の時間に、自己紹介や今年度の初めに当たっての担任としての思いを語った。その瞬間に、クラスで一番目立っていた女子生徒2名内の1名は、大きな声で「それが、先生の方針ですかぁ！」と茶化して『初めての先生でも言いくるめることが私にはできる』と言わんばかりにまわりにアピールするように言った。私は、「おっと、そう来たか！元気がいいなあ！ところで君の名前は？」と、名前を聞いたのち、「〇〇さん、これからよろしくね。またしっかり話をしようね。」と返していった。さらに目立っていた女子生徒Aは、逆にあまり反応しなかった。クラスの雰囲気は目立っていた女子生徒2名にその他の生徒が逆らえない雰囲気を感じるとともに、半数の生徒からは「また始まった」とうんざりするような雰囲気を感じた。

女子生徒Aの状況は、始業式が始まった最初の週に5日間中4日早退・遅刻した。

さらに、2学年時の女子生徒Aの授業におけるノート、ファイル、プリントへの落書きの状況を次に示す。女子生徒Aは、授業中はもとより、家庭学習においても次のような落書きが続いた。

「愛し愛され傷ついて、信じつくして裏切られ、それでもあいつについていく、それが藍の愛し方」
 「恋の華 咲く日もあれば散る日もある 例え散る日が訪れようと 我 恋に後悔なし」
 「〇〇〇〇連盟」, 「SEVEN STAR」, 「素字学上等! (ずうがくじょうとう)」, 「愛怒流(アイトル)」
 「この世に受けた生ならば、咲かせないのは我後悔残る。今度生まれてくる時も、咲いて散りゆく女でいたい。」
 「愛して愛して愛し続けて裏切られ、それが女の愛し方、親も女の笑顔も忘れ、ただ爆音とともに去っていく。今夜もシグナル背に受けて、我人生走り抜く暴走天使。恋した数は数知れず、本当に愛した女はお前だけ・・・」
 「今日が辛くとも、咲かせる華は一度きり、恋した事に後悔なし、我愛した人は一人だけ、夜桜満開に咲かせてみせますこの世の中に・・・」
 「華麗に舞い散る桜の様に、どうせ散りゆく命なら、恋して命散らせたい、貴方の笑顔ずっと見ていたいから、貴方を永遠に愛し続けて生きていたい・・・恋した数は数しれないけれど、本当に愛したのは貴方だけ・・・」

授業においては、上記のような状況で、教師との関係性が薄く、友人との関係は同様の価値観をもった固定化した生徒たちとの関係性のみであり、さらに近隣の同じ価値観をもった他校の生徒との関係も影響した。これは後にエスカレートし、所属校より他校の同じ価値観をもった生徒との関係が深くなり、所属校における居場所が少なくなっていく。さらに、遅刻や体調不良による早退、欠席がたびたびある状況であった。

このように、学習面、対人関係（教師関係、友人関係）の大きな課題による悪循環が続き、学校への適応感が低くなり、生徒指導上の課題がさらに厳しくなることが予想された。

しかし、学校への適応感が低いことは、問題行動の側面として、学校生活において本人がSOSを発信していると捉えることもできる。

そこで、次のような一人一人に役割と関わりを仕組む取組みと、遅刻、早退、欠席時に行う家庭訪問を継続し、生徒に粘り強く関わりきる取組みを継続した。これらの取組みにより多面的、総合的な生徒理解を図った。

② 2年次の授業・行事の取組み内容【一人一人に役割と関わりを仕組む取組み】

次の表のような取組みを実施した(表1)。

表1 2年次の授業・行事の取組み内容

日時	授業	ねらい	内容
4月	学活	クラスにおける人間関係づくり 協働的態度の育成	バイクドチーズケーキづくり
5月	総合的な学習の時間	地域の自然のすばらしさの発見から地域への誇りをもたせる。	身近な自然を活用した環境学習 地域の海辺の自然の生物調査
6月	集団宿泊研修	集団生活を通して、主体的、意欲的な態度を養う。相互連帯の意識を深める。	1泊2日の集団宿泊研修
7月	学活	クラスにおける人間関係づくり コミュニケーション能力の育成	バニラアイスづくり
9月	保小中合同運動会	役割を一人1役以上もたせ、中学生としてのリーダー性を育てる。	各競技、各係活動
10月	文化祭	役割を一人1役もち、自己存在感を与え、クラスの絆をつくる。	「劇」づくりにおける関わり合い

12月	修学旅行	・他の文化との交流学习 ・沖縄戦体験者の生の声を聴く体験学習 ・地元と南方との比較による発見学習 (海辺の生き物を通して)	沖縄修学旅行
12月	学活	クラスにおける人間関係づくり 協働的態度の育成	クリスマスケーキづくり
1月	学活	地域の老人会と協働して行う農園活動の集大成の収穫祭を通して、地域ともつながり、感謝の心と協働的な態度を養う。	老人会と協働した農園活動における収穫祭
※ 毎月	進路学活 道徳等	逆境を乗り越え、自分を変えていく人を知ることを通して、自分を見つめ、自らの生き方を深く考え、自ら自分の将来の生き方を切り拓こうとする意欲・態度を育てる。	逆境を乗り越え、自らの人生を切り拓いた人に学ぶ (感動体験に学ぶ)

③ 2年時の学校生活と問題行動における指導時の反応及び、家庭訪問等の状況

ア. 遅刻, 早退, 欠席時

女子生徒Aは、2年時の1学期初めの週、連続して4日間、早退、欠席した。早速、1日目の早退から家庭訪問を行った。そのときの保護者の反応は、「2年生になって早々、うちの子が何かしましたか?」であった。私は、「体調が悪いようだったので心配で様子を聞きに来ました。また、今日の配布物も一緒に持ってきました。」保護者は、「先生が家に来るのは子どもが悪いことをしたときばかりで、驚きました。」と返事が返ってきた。そして、保護者からこれまでの学校の対応への批判の思いをたくさん聴くことができた。

その後、過去の問題行動に捉われず、常にニュートラルを心掛け、早退、欠席した4日間を連続して家庭訪問した。

このようなスタートで始まり、保護者との関係はある程度順調に始まった。女子生徒Aだけでなく、他のすべての生徒にも同様に取り組む中、保護者との信頼関係を築ききっかけとなった。

イ. 定期試験週間における家庭訪問

これは、前任校での取組みを活かしたもので、定期試験週間の部活停止時期にクラス全員の家庭訪問を行い、生徒へ試験勉強に向けての励ましや家庭学習を促す声かけとともに、保護者との連携を行う取組みである。対象中学校においても学校では聞けない生徒・保護者の思いを聴ききっかけにもなり、女子生徒Aにおいても生徒理解が深まり、保護者との信頼関係を築ききっかけとなった。

ウ. 喫煙

2年時、トイレで友人とともに喫煙の疑いがあった。このことについて、いっしょにいた1名の女子生徒は自分の喫煙は認めたが、女子生徒Aのことについては答えなかった。女子生徒Aについては、たばこの臭いのあったことを確認したが、全く無表情で反応がなく、ただ黙って喫煙を認めなかった。家庭訪問においても同様で、保護者は子どもが認めていないことを踏まえ、保護者との話においても理解を得ることはできなかった。このようなことがあり、これまで築いてきた信頼関係は一気に崩れてしまう状況であった。このとき、教師と生徒及び保護者との関係性は最悪になった。このように、保護者との関係性は一進一退という状況であるが、保護者連携において、学校で生じた事実を伝えていくことは継続し、「良いことは良い。悪いことは悪い。」と、粘り強く生徒指導を継続していくことを校内で確認して組織的に取り組んでいった。

エ. 家出

女子生徒Aは、文化祭を挟む10数日間家出する。このとき女子生徒Aが公衆電話から家に連絡が夜遅くあり、このときの話の内容から、保護者たちとともに連絡のあった地域を連日探し続けた。心当たりの家を1件1件探すが見つからなかった。最終的には、10数日後に女子生徒Aは家に帰ってきた。このような取組みの中、再度保護者との信頼関係が少しずつ形成されていく。

④ 2年時の生徒の変容

◎沖縄への修学旅行におけるAに響いた沖縄戦体験者（語り部）による講話

これは、約2時間の長時間に渡る平和に関する学習であった。先に述べたように女子生徒Aは人の話を聴くとき、落書きなどを行う行動がよく見られた。このとき女子生徒Aが、修学旅行のしおりに記入するページに何か書き続けている状況を把握していた。しかし、このときはこれまでの状況と様子が異なっており、女子生徒Aの表情からも変化を感じていた。学習後の女子生徒Aの修学旅行のしおりを確認すると、これまでのような落書きではなく、語り部の講話の中で印象に残ったことを詳しく書き留めていた。語り部さんの話の内容を10数名の生徒の中で、一番書いていた。このとき筆者(八川)は、とても胸が熱くなり、感動の涙が目から溢れそうになっていた。

修学旅行後の女子生徒Aが書いた振り返りの記述を述べる。

「沖縄戦は、こんなにもたいへんだったんだなあ」って思った。
戦争中いろいろなことがあったのにこの人だけは生き残ってすごいなあって思った。
すごく「生き運」のあった人だと思った。
命を落としそうなことが何度もあったけど、それでも最後まで命を落とさなかったし。
すごい人だと思う。
また、この人が近くにいっても救うことのできなかった友達のことを申し訳なく思って、戦後にその友達の親のところへお詫びにいったのもすごいと思ったの。
だって「超勇気」のいることだと思うし、自分が置き去りにしてしまったから、命を落としてしまったと悩んでいるのに、勇気を出して親元へお詫びに言ってすごいと思った。
しかも、その親や家族の人も、この人を責めずに「『戦争』が悪いんだ。」と言ってくれたのも、この人はうれしかったと思う。
すごく救われたんではないかなって思ったの。マジイイ人たちだと思った。

修学旅行後すぐに女子生徒Aの家庭訪問を行い、保護者と女子生徒Aにこの記述の場面を想起して感動したことを伝えて、女子生徒Aの感性のすばらしさを評価して伝えた。

このように、女子生徒Aの変容や日々の学校生活における女子生徒Aのよさなど価値付けることを通して、女子生徒A及び保護者との信頼関係を築くことができていった。

4.2 3年時の取組みと生徒の反応

①年度初めの方針

年度初め、新年度の方針として、校長のリーダーシップのもと、進級する生徒たちにこれまでのことはリセットし、これからの生徒に期待することと進学に関する推薦基準を示し、これからの行動により全員に推薦のチャンスを獲得できることを決定した。このことは年度初めの始業式で生徒

に伝えた。そして、学級開き、PTA総会等で繰り返し伝え、生徒の意欲を喚起した。

校長のリーダーシップのもと、「推薦基準の明確化とやる気をもたせる声かけ」を継続し、校内でぶれない姿勢の確立、全教員で細かな連携を行い続けた。

この取組みにより、年度初めのスタートにおいて、女子生徒Aも含めて3学年の生徒たちは意欲的になり、遅刻や早退が激減した。このようなよい変容が現れたときをチャンスととらえ、家庭訪問を通して保護者にも生徒のよい変容を繰り返し伝え、家庭と学校と同じベクトルで関わっていきけるように取り組んだ。

女子生徒Aは、年度初めはとても良かったが、1学期後半からまわりとのギャップにより、学校での居場所がないという思いをもつようになり、遅刻、早退などが増え、一進一退の状況となる。それでも、学校体制で教員が一体となって粘り強く生徒指導を続け、担任はもとより、複数での家庭訪問による保護者連携を継続した。

②自ら進路を切り拓くための授業「進路学活、道徳等」

進路学活、道徳の授業では、逆境を乗り越えた人などいろいろな人の生き方に学ぶ授業を2年時から継続して取り組んだ。これは、いろいろな人の生き方に興味をもたせるとともに、過去が悪かったから将来も悪くはなく、過去の悪かった状況の逆境を乗り越え、自分をよい方へ変えていった人の生き方から学ぶように仕組んだ。そして、生徒一人一人に自分を振り返り、逆境を乗り越える意欲をもたせ、生き方を考えるきっかけとなるようにした。このことは、いろいろな家庭訪問のときやいろいろな場面で保護者に伝えることを続け、女子生徒Aについてもこれからの生き方を家庭でも話題にできるように働きかけ続けた。

逆境を乗り越えたいろいろな人の生き方に触れながら、自己の生き方を繰り返し考えさせていく中で、2学期の途中から女子生徒Aも自己を振り返り、これからの自分を考えていくことを考え始めた。この変容により、卒業後の進路先への希望が明確となり、その進路先の入試過去問題集を購入して家庭においても学習の努力を始めた。

4.3 生徒の変容

2年生時の修学旅行で沖縄の語り部さんの厳しい状況を乗り越えてきた話を聞いたあとから、女子生徒Aからいろいろな人の生き方や逆境を乗り越えた人の生き方に共感する感想を詳しく書いたり聞いたりすることが増えた。さらに、卒業後の自分の進路の目標が明確になってきた3年生の2学期から全体的に怠惰な傾向は少なくなっていき、問題行動が減っていった。特に、進路の実現に向けて授業や学習に意欲的に取り組むようになり、教師に対する態度においても以前のような反抗的な状況はなくなった。ただし、喫煙について小学5年生頃から始めていた生徒数名は習慣化しており、学校や外での喫煙はなくなったが、完全に止めることは難しかった。

女子生徒Aは、卒業後の目標をもったことで進路先の入試過去問題集などを活用して家庭においても学習に本気で向き合った。この変容に、保護者がとても感動していた。

最終的に高等学校の入学試験においても学習の成果を女子生徒A自身が実感し、女子生徒A自身が達成感を感じていた。結果は、見事合格し、自らの進路を女子生徒A自身の力で切り拓いた。

5. 成果と課題

本研究の成果として、関わる教師たちが疲弊感や無力感を感じるような状況においても、個別の課題を抱える生徒たちを中心として多面的・総合的な生徒理解を図り、粘り強くそれらの生徒たちに関わりきることを通して、生徒との関係性を少しずつ築いていけることが分かった。さらに、個に応じた指導を継続する粘り強い取組みと一人一人のよさを見つけ、役割と関わりを仕組む取組みを継続することで徐々に指導が入るようになり、個別の課題を抱える生徒をよい方向に変容させることができることが分かった。

そのポイントを5点述べる。

- ①日常のあいさつ・声かけ（反応はなくても他の生徒と同様に続ける）
- ②普段の学校生活の中で、よいことはよい、悪いことは悪いこととして毅然とした指導を続け、他の生徒と同じようにブレない生徒指導を継続する。
- ③課題のある生徒を他の生徒たちに広げていかないためのフォローを行う。
- ④日々の中で良い面を見つける努力を継続し、一人一人の言動や態度等を評価する。
- ⑤一人一人の進路や将来を考えたキャリア教育の視点をもった声かけや家庭連携を通して、一人一人を認めて希望をもたせる。

このような個に応じた指導を継続する粘り強い取組みを全教員で組織的に行うことで、個別の課題を抱える生徒を変容させることができることが分かった。

また、当初は個別の課題が大きい生徒に関わりをもたたくないという思いを持った教員やこれらの生徒たちへの偏った見方や認知の歪みなどが見られたが、常にニュートラルを意識するように働きかけることが重要であることが分かった。さらに、関係のある教員と一緒に複数で家庭訪問をする機会をもつことを通して、教員が生徒・保護者に関わりきっていくよさを実感し、教員の意識も変容していったことが成果である。

一方、課題としては次の点があげられる。喫煙等の問題行動は、中学校に在籍していた生徒との兄弟関係や当時の中学生との関係により小学校時代から始まっていた状況から、小学校と情報を共有し、小中連携を充実させて義務教育9年間を見据えた中学校区における生徒指導体制を築いていくことが必要であることが分かった。

引用文献

- 1) 文部科学省(2010)『生徒指導提要』
- 2) 柳生和男(2012)『生徒指導の充実のために』独立行政法人教員研修センター, pp. 32～33
- 3) 柳生和男(2012)『生徒指導の充実のために』独立行政法人教員研修センター, pp. 52～53
- 4) 有馬道久(2002)「児童・生徒理解の進め方」高橋 超・石井眞治・熊谷信順編著『生徒指導・進路指導』ミネルヴァ書房, p. 60

参考文献

- ・広島県教育委員会(2010)『生徒指導の手引き』
- ・石井眞治(2009)『児童・生徒のための学校環境適応ガイドブック』協同出版株式会社
- ・栗原慎二・井上弥(2010)『アセスの使い方・活かし方』ほんの森出版株式会社